
I want to stay with you.

トムトム

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I want to stay with you.

【Nコード】

N8805Z

【作者名】

トムトム

【あらすじ】

幼馴染を互いに意識し合う二人。

期末テストの最終日に皆既月食を見ようということになったけれども…。

彼（哲） 目線・彼女（真美） 目線で展開していきます。

皆既月食を見よう 哲

side 哲

「先輩、金曜日先輩の家に泊めて貰えないかな？」

「部屋は空いているからいいけど、どうしたの？」

「皆既月食があるんだ。夜なんだけど…テスト明けの金曜日に」

「分かった。親に聞いてみるね。ところで、テストの方はどうなの？」

片思いの彼女に話を強制的に戻される。今は期末テストで今日は火曜日。

「今までよりはいいですよ。英語だけはね。先輩のお陰ですよ」

俺は耳元でわざと囁いてみる。実は彼女が耳元が弱いことを最近知ったんだ。

女子にしては背が高い方の彼女でも190センチに近い俺と一緒にどうしてもちびっ子と大男になってしまう。

「…人をおもちゃにしないで欲しいなあ」

上目遣いで俺を睨んでる。その仕草は申し訳ないけど、俺を試しているのかと

思わずにはいられない。彼女だったらなあ、あんなことやこんなことを…

「こら、変な妄想しない。全くもう」

「妄想じゃありませんよ。空想ですから。空想の中の先輩はもう少しだけ

おしとやかなんですけどね」

「うっ」

先輩は口をパクパクしている。だからそんなことしていたらチュツとしたくなる

じゃないか。ワザと狙っているのではなくて、天然でこんな対応だ

から

こっちはヒヤヒヤしっ放しだ。正直心臓が1個じゃ足りない。

「おしとやかなつもりですが？」

先輩がようやく反撃をする。

「おしとやかなのは…その長い髪だけでしょう？普段はその髪の毛を振り乱して

廊下をかけずり回っているでしょうが。そろそろ淑女を目指した方がよろしいのでは？」

普段の彼女はお転婆娘をそのまま大きくした状態。

こないだも学校のケヤキの木に登ろうとして怒られていたっけ。

「スカートで木登りしようという人は今時いませんよ」

「…ここにいるもん。制服のリボンが飛んでいったから…」

心なしか胸を張っているような気がするんだけど…なんか間違っている。

「胸を張っても、大きくなったようには見えませんよ」

彼女の顔がみるみると赤くなる。しまった…言いすぎた…これは…ヤバイ

「このセクハラ男。こんなんでどうして皆かっこいいって言うのよ」

「そりゃあ、顔でしょう？親には感謝してますよ」

さも当然といった表情で俺は言っただけでみた。彼女の顔が更に赤くなる。

俺のことをかっこいいという、女の子が良く分からない。見た目はいいけどさ

自分で言うのもなんだけど、俺の性格相当ひねくれていると思うだが。

「もう、本当にむかつく」

そういうと彼女はおれの胸をポカポカと叩きはじめた。

必死になっているモグラたたきをやる女の子にしか見えなくて思わず笑みが浮かんでしまう。

「もう、いい。先に帰る」

そういうと彼女は先に帰ってしまった。俺は一人取り残された。

「ちえっ、こんなに好きなのに。いじりたくて仕方ないのに」

俺はそう悪態を付くしかなかった。

皆既月食を見よう 哲（後書き）

友達以上恋人未満で告白をしていない二人です。

（前作の短編の続編ではないです）

かたやお転婆十天邪鬼、かたやイケメンだけでも腹黒十毒舌。

互いに一緒にいたくっているのに意識して空回りしてしまう。

そんな二人の恋愛模様です。

皆既月食を見よう 真美1

side 真美

「ああ、悔しい!!」

部屋に戻った私はすぐにクッションを壁に投げていた。

「どうせ、貧弱ですよ」

もう一度クッションを投げた。バスンといい音がする。

「ああ、どうしてこんなに貧弱なんだろう：私だけ：」

私は大きいため息をついた。通っている学校の制服はセーラー服。胸が大きい子は更に大きく、小さい子は更に小さく見えてしまう。もちろん：私は後者で残念な位だ。

器械体操をやっていた時はその体で良かったと思ったこともある。けれども、最後の試合で怪我をして引退してからはコンプレックスでしかない。

「真美？お昼はどうする？」

階下で母が私を呼ぶ。母のパートの時間が近いはず。

「自分でするから。帰ってくるまで寝てるから起こしてね」

「はいはい、今夜はお父さんがいないからピザでもいいかな？」

「いいよ。私は凄く嬉しい。楽しみに待ってるね」

父はピザが嫌いというか、チーズが嫌いだからいないときは夕飯がピザになる。

ちなみに母のパート先は学校のそばのパン屋だったりする。

「そういえば：哲君から電話あったわよ。うちで皆既月食見るんだって？」

「うん、うちのベランダ目当てなのかな？南向きだから」

「そう言われればそうね。お姉ちゃんの部屋に寝てもらえばいいか

しら？」

「…なんで確認する訳？」

「付き合っているのなら同じ部屋がいいでしょう？」

「お母さん！！何言っているの？」

「そろそろ色気のある話が聞けてもいいじゃない？哲君なら大歓迎よ」

無責任なことを言って母はパートに行ってしまった。

子供の頃の恋愛だったら、こんなに悩まなかったかもしれない。今は…好きなだけじゃ物足りない。傍にいたい。触れていたい。こんなに独占欲の強い私を哲は好きでいてくれるんだろうか？

子供の頃の約束は今でも有効なんだろうか？

私は急に眠気に誘われるように目を閉じた。

戻れるなら、幼いころのあの頃に戻りたい。

「真美ちゃんは大きくなったら何になりたい？」

「真美は…哲君とずっと一緒にがいい」

「僕は体操の先生になりたいんだ」

「だったら真美も哲君と一緒に先生になる」

「約束だよ」

「うん、約束」

「真美？起きれそう？」

「ううん、お帰り。お母さん」

ボーっとする頭で頭によぎった事を聞いてみた。

「ねえ、なんで哲は私が止めたのと同時に体操を止めたの？」

「それは、お母さんに聞くより哲君に聞いたら？それより進路どうするの？」

「そうだよねえ。夢は叶えるものだよね？」

「真美の夢にもよるけどね。肉体的に無理なら止めなさいね」
母は心配そうに私を見ていた。

「大丈夫。多分叶えられるんじゃないかな。一度先生に相談してみる」

「まだ：捨て切れてなかったのね。あの夢」

「うん、その前にまずは勉強しないと。でもご飯食べよう」

私と母は部屋から出た。まずは脳に栄養をあげないと。

「競技に戻りたい？」

「違う。コーチになりたいの」

「その前にテストはどう？」

「まあまあよ。ある程度しっかりやらないとクラス分けにかかってくるから」

「じゃあ、しっかりやりなさい。もしなれなかったら：どうするの？」

「そうしたら、英文科に行こうかな。翻訳ができる所に行きたいなあ」

「そういえば、英検の結果ってそろそろ出るわよね」

「多分ね」

母がテーブルにおいたマルガリータを1切れ食べる。このとろけるチーズがおいしいのにね。

お父さんってなんかもったいない気がする。

「その結果を見てからでもいいんじゃない？」

お母さんの言いたい意味が分かる。私の夢は極端だからどちらに進んでもいいように

考えろってことだろう。

「明日もテストでしょう？ 無茶しないのよ」

「分かってるよ」

もう、今のぬるま湯ではいられない。そろそろ決断しないといけない。
自分の為にも。哲の為にも。

皆既月食を見よう 哲2（前書き）

気まぐれいまま、金曜日になってしまいました。

皆既月食を見よう 哲2

「お疲れちゃん」

最後のテストが終わってクラス全体が浮ついた状態。

気持ちには分かるぜ。俺だってそうしたいんだ。だけどさ…そんな気にならない。

「哲？カラオケ行かね？」

「俺？今日はいいや。皆で行って来いよ」

いつもなら、ノリノリでカラオケに行くんだけど今日は行かない。夜に備えないと。俺の方から誘っておいて寝オチだけは許されない。それに真美の俺に対する態度がなんか…他人行儀なんだよ。

今日の約束は破られることはないんだが、一緒に行っていた学校もなくなった。

先に勝手に行っちゃうんだ。帰りも同じように先に帰っちゃおう。

メールをするのちゃんと返事は戻ってくるけど、なんか素っ気ない。

いつものメールも必要最低限なシンプルなものだったけど、

あの日以来、真美からメールが来なくなった。

俺？何か地雷踏んだ？真美が傷ついてる？

とにかく謝っちまわないといけねえよな。女の子に貧乳だろって言ったようなものだし。

男が皆がメロンみたいな巨乳が好きなのは訳じゃないんだよ。

申し訳ないけど、俺は巨乳嫌いなんだよ。なんか怖くってさ。

だったら、手にすっぽりと収まるサイズの方が好きなんだけどな。

素直にそれを口にしたら『この馬鹿』でもう相手にして貰えないだろう。

それとも…進路選択で結論を出さないといけないもんな。2年生だ

から。

ほんの3日早く彼女が生まれただけなのに、学年が違うなんて。今はさすがに慣れたけど、幼稚園に真美が先に入る時は凄くごねたものだ。

幼稚園まで歩いていく真美と一緒に幼稚園の前まで一緒に歩いて門で分かれるときには

大泣きして、園長先生まで巻き込んで迷惑をかけたようだ。

ずっと、彼女が好きだ。アヒルの雛のように刷り込まれてるのかもしれないと思ったこともある。

でも、彼女以上に好きになれる相手はいなかった。中学では通り1本で学校が別れてしまったから

違う子を好きになれたはずなのに、それすらなかった。

体操で会うのが唯一の時間だったんだ。俺にとってはデートそのものだった訳。

だから真美が怪我をして引退した時も体操に飽きたと言って同時に止めた。

空いた時間は真美のリハビリの時間に付き合っていた。一緒に宿題をやったりしていたから

同時に俺の成績も上がったから、なんとか今も同じ学校にいられる。

進路で悩んでいるとしたら、体操の先生になろうって言った事だろうな。

今の彼女でも体育の先生なら大丈夫だと思う。小学校の先生でも問題ないだろう。

だったら、俺も追いかければいいだけ。

そうじゃなければ、俺のもとにその身だけで来てくれてもいい。

その位、真美しか見れないんだ。真美だけが欲しいんだ。

どうしたら？ 僕のものになる？ 今のままではいけないよな。

やっぱり、今日にかけるしかない。俺がリードしていいよな？
彼女のアクションを待つのは男として卑怯だよな。

決めた。告白をしよう。本当に好きなこと。好きすぎて自分が壊れ
そうなこと。

彼女なら、ずっと見ている彼女なら俺の全てを受け入れてくれるこ
とを信じて。

皆既月食を見よう 哲2（後書き）

テスト期間はテストに集中しましょうね。

皆既月食を見よう 真美2（前書き）

一方真美の方は…

皆既月食を見よう 真美2

「真美、ランチしようよ」

親友の歩美からランチのお誘い。そういえば最近行っていないなあ。

「うーん、行きたいけど今日はいいや。今日って皆既月食なんだって」

「へえ、そうなんだ。真美は見るの？」

歩美が覗き込むように見る。150センチの歩美はちっちゃくてかわいいと思う。

「うん、哲が家に来るんだって」

「うん、うん。そうだね。哲君はもれなく付いてくるのね」

幼稚園からずっと一緒に歩美には私と哲の行動がよく見えているらしい。

「でもさ、哲ってば…人の事を貧乳って言ったの」

「事実だから。まずは受け入れようね」

歩美は良くも悪くも正直に言ってくれるから、私は素直に受け入れる。

「でも、直接言われるのも嫌よね？特に哲君だったら」

歩美の言うことに私は首を縦に振る。他の男子だったらスルーできるんだけど。

「ずっと一緒だからさ、一番基本的な事忘れていない？」

「哲だからってこと？」

私がそう言うと、歩美は納得した顔をした。

「なんだ、分かっているじゃない。哲君は真美の何？」

「私の幼馴染。私が好きな人。哲以外の人は考えられない」

「上出来じゃない。今夜それをいいなさいね。すぐに解放してあげるから」

「買い物に行こうね」

そうして私は歩美に連れられて教室を出た。

しばらくして廊下で哲に会う。歩美が間髪入れずに切りだした。

「哲君、奥さん借りるわよ。別にいいわよね？」

「歩美先輩だったら：いいですよ：」

怨みがましい目で哲が私を見る。私何かした？

テストに集中したくて、メールも返信だけしかなかったから？
早く家を出たことを怒っているの？どっちなのかなあ？

「哲君、そんな顔すると真美は家に泊めるわよ。ほらっ、行くわよ」
そう言うと、歩美に引きずられるように私は校舎から出る。

「よしっ、これで仕込みはオッケー」

「何、企んでるのよ。ちよっと」

「だって哲君、私に嫉妬の炎メラメラ燃やしてるのよ。可笑しいでしょう？」

歩美は哲のことを煽るだけ煽って置き去りにしたんだ。

夜に会う私の立場も考えて欲しい。

「ところで、今更ですが。エッチはしたのよね？どう？やっぱり痛い？」

はあ？エッチって？

「誰と？」

「決まっているじゃない。哲君とよお。もしかしてしていないの？嘘？」

「歩美、勝手に妄想しないで。告白すらしてないのに」

「真美、あんた鈍いにも程があるよ」

その後、私は歩美から延々とお説教を食らう羽目になる。

「分かった。哲君がそんなに貧乳が嫌なら、貧乳でも谷間を作れることを証明しよう」

「いや、あっ、あのね、歩美…」

ランチで入ったパスタ屋さんで、フォークを握りしめて力説しなくてもいいよ。

OLのお姉さんが若いっていいわねって目でこっちを見てるよ。中にはグッジョブポーズしている人もいるんですけど。とにかく恥ずかしくて私は俯くしかない。

「歩美はさ、谷間があるからいいじゃない」
セーラー服から程良く厚みがあるように見えるから羨ましい。

「こんなのね、寄せて集めてパット入れるのよ。もしかして持っていないの？」

私は真っ赤になって頷く。こんな羞恥プレイはもう勘弁して欲しい。

「分かった。お姉さんが見てあげる。その位のお金はあるでしょう？ サイズが合っていないかもよ」

フムフム。サイズが合っていないって可能性があるんだ。

「そうと分かれば、真美の勝負下着を買いに行こう」

歩美は人のことをおもちゃにしているのかな？ ちょっと不安になった。

「本当はね、私も彼氏とそろそろ…かなあってね」
そういうことはもっと早くに言ってよ。こっちは免疫がないんだから。

「私はおまけな訳ね。哲に本当のこと言っちゃおうかな」

「いいよ。夜だったら。私今夜は彼とお泊りだから。真美と一緒にだね」

私は開いた口がふさがらなくて口をパクパクさせた。

「一緒じゃない。違うから」

「まあ、まあ。そう言わないで。セクスイダイナマイトになれるかな」

ノリノリな歩美にひきずられて私はお店を後にした。

皆既月食を見よう 真美2（後書き）

完全なガールズトークです。意外に歩美は策士だったりします。

皆既月食を見よう 哲3 (前書き)

さあ、月かけ始めよう。

皆既月食を見よう 哲3

「歩美先輩と何をしたんだよ？」

もうすぐ皆既月食が始まる。今は真美の部屋にいる。真美の部屋のベランダは南向きだから

今回の月食見るのには最適なんだよな。

でも、その前にあの策士に何を吹きこまれたのか確認しておかないと。

あの人はたまにとんでもないことを吹きこんで俺たちを振り回して楽しんでいる。

「ああ、買い物だよ。どうして？」

机に向かって宿題をしていた彼女がくると向きを変えて正面を向く。

んん？何かが違う。ありったけの記憶をひっくり返して思い出してみる。

「哲？私なんか変？」

俺が戸惑っているのが真美に分かってしまったようだ。真美の目線が自然と下に落ちたのを見逃さなかった。そうか、胸か。

ガン見は良くないだろうから全体を見るようにして見ていると胸が成長している。

いくらなんでも整形はないから：これは一体どういうことだ。

「すっごく大変だったんだから」

真美は俯きながら、恥ずかしそうに切り出した。

「歩美がね、彼氏とお泊りだから勝負下着を買いに行くなって連れまわされたの」

申し訳ないが、口に含んだコーヒーを吹きそうになってしまった。あの人が勝負下着ですか。ほほお。人を煽るだけ煽って：全く。

「お店の人にきちんとサイズ計ってもらったら：ちょっと大きくなつたの。」

でも、哲はグラドルみたいな巨乳が好きなんでしょ？私じゃまだまだよね」

おい、真美。何をいつているんだ？俺がいつおっぱい星人になるんだ？

「ちよっと、待てよ。真美」

俺はとっさに真美の肩を掴んだ。

「もう少し言わせて。ずっと哲が好き。哲が巨乳が好きなら私努力するから。」

こんな私じゃダメ？もう幼馴染なだけ？」

ずっと俺が言いたくても言えないことを何でこんなに簡単にこいつは言ってしまうんだろう？

「哲？ねえ、哲はどうなの？」

不安そうに目を潤ませながら真美が俺を見つめる。

今まで必死に押さえていた理性が：プチンと切れた。

掴んだ肩を自分の方に引き寄せて抱き寄せた。

「俺な、おっぱい星人じゃねえよ。ごめんな。そんなことで悩ませて。あんまり言わないからな。」

覚えておけよ。俺の方が真美のことを好きだ。勉強嫌いの俺が必死になって今の学校に入れたのも

真美、お前がいたからだ。」

「哲：それって：」

「まだ終わってねえぞ。体操の先生にならなくてもいい。俺と一緒に生きてくれないか？」

「それって、私でいいの？もっと素敵な人がいるかもしれないよ？こいつ、俺の告白本気にしていないな：。どうしたら分かるんだ。」

「なあ、俺の体力ならお前を力ずくで抱いてモノにもできる。その位お前が欲しいんだ。」

なのに、お前は俺がおっぱい星人だと勘違いしてこんなことするから：俺の：」

言葉にしているのか不安になって言葉を濁してしまった。

「哲、最後まで言ってる。何でもいいから。哲の気持ちが知りたい」

「理性がもたねえ。皆既月食なんて無視しておじさん達に頭下げてお前を貰う」

俺がそう言った途端、真美の両目から大粒の涙がポロリと零れた。

「俺？ やっぱりがつついていたよなあ。ごめん、今の忘れて」

「違う。嬉しいの。そんなに哲に愛されてて。でも：その前に：」
その前に：その前に何があるんだ？

「父さんたちが覗きに來そうだから：ちゃんと皆既月食を見よう」
そういうと真美は俺の背中に恐る恐る腕を回した。

「でも、もう少しだけ：このままでいさせてくれよ。真美を感じさせてくれよ。」

さっきは乱暴なこと言ったけど、そんな事はきようはしないからさ」

「きよ、今日は？」

真美は不安そうに俺を見上げた。

「そう、月と同じように俺たちもリセットするんだから」

真美の頭を優しく撫でながら囁く。昔から頭を撫でられるの好きだからな。

「さあ、寒くないようにしてベランダに行こうか。冷えたら戻ろうな」

真美にハンガーにかけてあるベンチコートを渡してやる。体操の時のだから俺とお揃いだ。

「うん。約束だからね。風邪ひいたら哲のせいだって皆に言うもの」
俺のせいだって言われたら、違う方向で勘違いを受けそうだ。それは困る。

「真美、分かってるよ。さあ、皆既月食を見よう」
俺は彼女の手を取って彼女の家のベランダに出た。

哲
f
i
n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8805z/>

I want to stay with you.

2012年1月1日16時46分発行